■研究十二月往来〈117〉

室町時代の観世大夫の実名と通称

表　あきら

室町時代に幕府の能大夫として活動した観世大夫は、実名(諱)で列挙すれば、1清次―2元清―3元重―4(正盛)―5之重―6元広―7元忠―8元尚の八代であった。世阿弥の長男の元雅は、春日興福寺参勤猿楽の能大夫としての観世家を相続し、観世大夫とも呼ばれたが、幕府の能大夫の地位に就かないまま早世したので、右の歴代には加えていない。観世大夫家の系譜もその立場を採っている。

初代の観阿弥の実名清次は『申楽談儀』に見える。二代世阿弥の元清も『風姿花伝』第三の奥書の署名や『申楽談儀』に用例が見える。三世音阿弥の実名元重を明示する同代の記録は管見に入らないが、七世元忠法名宗節が書いた「観世代々」(観世文庫蔵)に「観世大夫元重　法名音阿弥」とあり、他に異説もないので、事実と解される。

四代の実名は、同代の記録がなく、信頼できる後代の伝えもない。宗節の「観世代々」には「観世大夫　松盛　名ノリ失念」とあり、彼の言う「名ノリ」が実名であることは同文書内に明証があるので、七世時代にすでに四世の実名は不明となり、法名だけが伝えられていたことが知られる。法名は「せうせい」「せう盛」(観世与左衛門国広筆『四座之役者』)、または「ぜうせい」(『宗五大艸紙』)とする説がより古い。江戸初期の『四座役者目録』が「正盛」にシャウセイと振仮名して掲出し、「松盛」がいい由を加筆しているのは、実名ではなく法名を見出しに用いたもので、編者観世勝右衛門元信は「観世代々」を見て(傍証がある)「松盛」説に左袒したのであろう。宝永四年(一七〇七)編の『観世累葉履歴』が四世の名を「政盛」とするのは、『四座役者目録』の「正盛」を実名と解して改変しただけで、根拠あってのことではあるまい。その「政盛」または「正盛」を四世の実名と誤解している向きが多いが、実は法名に由来する後代創作の名なのである。なお宗節が四世の法名を「松盛」と記すのが事実か否かにも疑問がある。「せうせい」と仮名遣の開合は矛盾しないが、『宗五大艸紙』は「ぜうせい」と濁点付きで記録している。「松」はジョウとは読まないのではなかろうか。

五世の実名も同代の記録がないが、観世文庫蔵の謡本「玄上」(紘上・玄象)の永正三年(一五〇六)奥書に「之重本写」とある。五世没後六年目の記録であり、実名「之重(ユキシゲ)」だったと信じてよかろう。後代にも異説はない。六世元広と七世元忠は、謡本の奥書に明瞭にそう署名しているので、確実である。

八世は、大夫就任直後の永禄九年(一五六六)には元盛だったが、二年後には元久、天正元年(一五七三)には元尚に改めている。最後の名で代表させるのが無難であろう。『四座役者目録』は「元盛」で掲出し、「元之トモ云」と追記している。「元之」は「元久」の誤写と推測していたところ、「観世代々」で父の宗節が「元之」と明瞭に書いているのに驚かされた。だがそれも老眼ゆえの誤読または誤写と解したい。謡本奥書の「元久」署名は「之」にすこぶる紛らわしい。離れて住む子の一時的な実名を父が誤ることも、あり得ないことではあるまい。

なお、元尚のように何度も実名を変更する人は珍しくなかった。子の九世は照氏→忠親→身愛→暮閑と改名したし、金春禅竹も貫氏から氏信に改めている。七世までの観世大夫はそれが知られていないだけかも知れない。

明治維新以前は、実名は書状・伝書などの格式ばった本人署名以外にはめったに使われず、世間も本人もふだんは弥七・新助などの通称を使用するのが常だったので、通称はわ

かるが実名不明の人がほとんどである。観世大夫の実名が八代中七人まで判明するのは、名家ゆえの稀なる現象と言えよう。

観世大夫の通称は歴代が三郎だったらしいが、意外に明確でない。「観世大夫」なる称号や芸名「観世」がより多用されたためらしい。

世阿弥や音阿弥が三郎だったことは当時の記録に確証がある。観阿弥の通称は不明であるが、山田猿楽三兄弟の末子であった彼が三郎と称したのを、子の世阿弥やその養子の音阿弥が継承したのであろう。四世は「又三郎」で、同代の記録が多い。父の三郎元重と区別するため「又」三郎と称したのであろう。広義の三郎ではある。五世之重の通称に関する当時の記録は、『大乗院寺社雑事記』の延徳元年(一四八九)十一月卅日の記事の「当院楽頭観世三郎也」を知るのみである。これは以前から観世大夫が楽頭だったのを昔の大夫の通称で記録した可能性があり、明証とは言えないが、『宗五大艸紙』が没後の彼を「三郎」と記している。三郎が通称だったと認めてよかろう。

厄介なのは六世元広の通称である。同代の記録が皆無なのに、『観世累葉履歴』は「四郎」とし、近年編纂の系譜類もみなそれに従っている。だが、これは誤伝に違いあるまい。世阿弥弟の四郎(音阿弥の父)以来、観世座の脇之為手(後代の脇とは違う。準大夫級の役者)の代表的人物の通称が四郎であり、受領して四郎左衛門と称することもあった。正月四日の室町幕府の謡初にも、観世大夫と観世四郎とが参上し、祝言謡を歌う観世大夫のみならず、歌わない観世四郎も御服を頂戴することが恒例になっていた(『年中行事記』等)ほどである。元広在世期前後にも観世四郎(左衛門)吉次・吉徳父子が活動していた。そんな名を大夫やその嗣子が通称に用いるはずはない。四郎説は捨てて然るべきである。歴代と同様に三郎だった可能性が強かろう。

七世元忠の通称も不明で、観世家系譜にも伝えがない。歴代の中で最も多くの署名を残す人物なのに、十四歳で観世大夫になったためか、当人も世間も彼の通称を伝えていないのである。が、先代の三男だったと伝えられ、これまた三郎が通称だったかと思われる。

八世が三郎だったことは、当人の署名にも第三者の記録にも明証がある。

そのように観世大夫歴代の通称だったと認められる「三郎」が、江戸期には使用されなくなった。九世は「与三郎」で名残を示しているが、十世以後は「三十郎」が観世大夫や嗣子の通称として襲名される。他家からの養子や兄早世のため弟が継いだ場合が例外である。

〔92・2・1〕(法政大学教授)